

楊鴻勛先生の来日と頭塔復原

平城宮跡発掘調査部・建造物研究室

本研究所以事務局を置く古都調査保存協力会（代表・青山茂教授）の招聘により、中国社会科学院考古研究所の楊鴻勛先生と中国文物研究所の張之平先生が来日された。楊鴻勛先生は、新石器時代から唐代にかけての発掘建築遺構復原研究の第一人者であり、一方の張之平先生はこれから始まる応県木塔（遼代）の修理担当をつとめる気鋭の女性建築史家である。

日本での滞在は、1993年2月17日から27日までの短い期間であったが（張先生は都合によりさらに3日来日が遅れた）、精力的に各地の古建築・庭園・発掘現場を見学された。とくに奈良と京都では、興福寺・春日大社・新薬師寺・相国寺の解体修理現場を視察されるとともに、本研究所で開催された研究会において、鈴木嘉吉・岡田英男・濱島正士・田中淡らの日本側研究者（敬称略）と、古建築の修理・復原に関する意見を活発に交換された。

今回の来日活動のなかで、私達に深い感銘と印象を残したのは、楊鴻勛先生が試みられた頭塔復原のスケッチである。楊先生は、頭塔の発掘・整備現場を視察されたあと、鈴木所長の冗談混じりの依頼に応え、またたく間に3種類の復原案（方案一～三）を考えられ、実際にそれを図面化されたのである。この3案は、いずれも5層の屋根をもつ外観に復原するもので、方案之三は日本人の復原案とそう変わらないが、他の2案は最上層に覆鉢形の土饅頭を用いる特異なものである。方案之一はそれを露出させたストーパー風の外観、方案之二は覆鉢の上に屋根を架けた多宝塔風の外観にデザインされている。いずれも日本人には思いつきにくいアイデアであり、おおいに参考に値すると思え、ここに紹介させて頂いた。

（浅川滋男）

方案之一
立面・断面

方案之二
復原パース

方案之三
立面

方案之二
立面